

JASRAC講座 ミュージック・ジャンクション 世界を旅する音楽～第2回「アラブの音楽と詩」～ (2月27日 けやきホール)

海外での活動経験が豊富な演奏者などの視点を通じて世界各地の音楽や文化、楽器などを紹介する「世界を旅する音楽」シリーズ。第2回は、「アラブの音楽と詩」と題して、中東の弦楽器・ウードの演奏や音楽理論と詩の文化の解説によりアラブの音楽を紹介した。この模様は、ライブ配信サービス「ニコニコ生放送」で配信され、延べ13,100人が視聴した。

【出演】常味裕司〈ウード奏者〉、アルモーメン アブドーラ〈東海大学・国際教育センター准教授〉

【司会】佐野啓子 【監修】北中正和〈音楽評論家〉

■第1部

常味裕司さんが楽器ウードの特徴やアラブ音楽と日本の関係について演奏を交え紹介した。

ウードは古代ペルシャの弦楽器バルバットが起源とされ、中世の頃世界中に伝わり、西洋ではリュート、東洋では中国琵琶や日本の薩摩琵琶となった。常味さんはウード(oud)について「アラビア語で木片や枝、棒などを意味し、旧約聖書にも登場する弦楽器。アラブ世界の人にとってウードの音は心のふるさと」と説明した。

また、「けやきホールの建つ地にかつて居を構えていた作曲家・古賀政男さんはアラブ音楽に注目し、1966(昭和41)年にエジプトでアラブの作曲家アブドゥル・ワッハーブに面会した」というアラブ音楽と日本の関係を物語る興味深いエピソードも紹介され、『Layali El Jazaier』などワッハーブの楽曲3曲が演奏された。

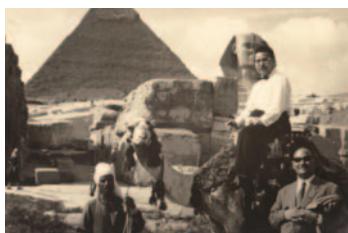
アラブの音階・マカームについて常味さんは、「アラブ世界には多様なマカームが存在しており、その数は何百、何千とも言われている。西洋音階に慣れた耳には少しづれたように聞こえるかもしれない」と、いくつかのマカームを演奏し特徴を解説した。初步的なマカーム「ラスト」は「喜びを表現するのに一番ふさわしい音階とされている。くすんだような印象だが、悲しみや苦しみも含むのが人生の喜びだとアラブ人は考える」と説明し、『Samaai Hijazcar Kurd』を演奏した。

■第2部

アラブ世界における言葉と音楽の関係について、アルモーメン アブドーラさんが解説した。



ウード奏者の常味裕司さん



写真提供:古賀政男音楽文化振興財団

アルモーメンさんはアラブ音楽の歌詞について、「カセイーダ」や「ムワッシャー」などの伝統的な詩の形式が土台になっており、この形式は、現在に継承され、今でも親しまれている。アラブの人々は1,400年前にできた詩を聴いて共感することができる」と説明した。

アラブ音楽には哀愁の漂う曲が多く、「アラブの人々は、過去のノスタルジックな気持ちを歌うことを好む。常に過去を思い、祖国や失った恋人、幸せだった時代などがテーマになることが多い」と解説。さらに、「アラビア語の抑揚や韻を踏むという特徴が、アラブ音楽を発展させた。言葉の奥深さや表現の多様さが詩に表れる。日本人は、詩を自分の中にとどめているが、アラブでは伝えることや披露することが前提で、それがメロディに発展する」と説明した。

つづいて、アルモーメンさんの呼びかけで常味さんが再登場。自由型の伝統形式「ムワッシャー」で書かれた「Lamma Bada Yatathanna」を常味さんの伴奏で朗読した。

アラブ諸国では、自分の国に対する思いを、詩や歌にすることが一つの表現として確立されている。パレスチナの歌「Mawtini」についてアルモーメンさんは、「詩人イブラヒム・トゥーカーンによって書かれた詩であり、後にシリアやイラク、アルジェリアがござって国歌にした。自分たちの将来は美しいものであると綴った詩である」と解説し、常味さんの即興演奏にあわせて朗読した。



アルモーメン アブドーラさん



当日の模様は、ライブ配信サービス「ニコニコ生放送」で配信しています。

<http://www.jasrac.or.jp/culture/stream/index.html>